

# レ・ミゼラブル

序

ビクトル・ユゴー

豊島与志雄訳



## 序

一七八九年七月バスティーユ牢獄の破壊にその端緒を開いたフランス大革命は、有史以来人類のなした最も大きな歩みの一つであつた。その叫喊きょうかんは生まれいずる者の産声うぶごえであり、その恐怖は新しき太陽に対する眩惑げんわくであり、その血潮は新たに生まれいでた赤児の産湯うぶゆであつた。そしてその赤児を育つるに偉大なる保母がなければならなかつた。一挙にして共和制をくつがえして帝国を建て、民衆の声に代うるに皇帝の命令をもつてし、全ヨーロッパ大陸に威令したナポレオンは、実に自ら知らずしかの赤児の保母であつた、偉人の痛ましき運命の矛盾である。帝国の名のもとに赤児はおもむろに育つて行つた。やがて彼が

青年に達するとき、その保母にはワーテルローがなければならなくなつた。

「自由」とナポレオン、外觀上相反するその二つは、実は一体の神に祭らるべき運命にあつた。フランスの民衆はその前に跪拜きはひした。彼らのうちにおいてその二つは、あるいは矛盾し、あるいは一致しながら、常に汪洋おうようたる潮の流れを支持していた。そして彼らの周囲には、古き世界の伝統があつた。伝統に対する奉仕者らが、神聖同盟の強力が。けれども彼らの心の奥には、パリーの裏長屋の片すみには、「自由」とナポレオンの一体の神が常に祭られていた。一八三〇年七月の革命は、また一八三二年六月の暴動は、底に潜んだ潮の流れの、表面に表われた一つはとうの波濤はとうにすぎなかつた。

その動揺せる世潮の中を、一人の男が、惨みじめなるかつ偉大な

る一人の男が、進んでゆく。身には社会的永罰を被りながら、周囲には社会の下積みたる浮浪階級を持ちながら、彼はすべてを避けず、すべてに忍従しつつ進んでゆく。彼の名をジャン・ヴァルジャンと言う。

ジャン・ヴァルジャンは片田舎かたいなかの愚昧ぐまいなる一青年であつた。彼は一片のパンを盗んだために、ついに十九年間の牢獄生活を送らねばならなかつた。十九年の屈辱と労役とのうちに、彼は知力とまた社会に対する怨恨えんこんとを得た。そして獄を出ると、彼が第一に出会つたものは、すべてを神に捧げさかつくしたミリエル司教であつた。そこに彼の第一の苦悶くもんが生まれる。神と悪魔との戦いである。苦悶のうちに少年ジェルヴェーについての試練がきた。彼は勇ましくも贖罪しよんざいの生活にはいり、マドレーヌなる名のもとに姿を隠して、モントルイユ・スジュール・メールの小都市

において事業と徳行とに成功し、ついに市長の地位を得た。しかし彼の前名を負つて重罪裁判に付せられたシャンマティユーの事件が起こつた。そこに彼の第二の苦悶が生まれる。良心と誘惑との戦いである。彼は自ら名乗つて出て、再び牢獄の生活が始まつた。しかし彼は巧みに獄を脱して、不幸なる女ファンティーヌへの生前の誓いを守つて、彼女の憐あわれなる娘コゼットを無頼の者の手より取り返し、彼女を伴なつてパリーの暗黒のうちうちに身を隠した。そしてそこにおいてあらゆる事変は渦を巻いて彼を取り囲んだ。警官の追跡、女修道院の生活、墓穴への冒険、浮浪少年の群れ、熱情のマリユス、無為のマブーフ老人、ABCの秘密結社、ゴルボー屋敷、無頼なるテナルデイエの者ども、少年ガヴローシユ、マリユスとコゼットの恋、一八三二年六月の暴動、市街戦、革命児アンジョーラ、下水道中の逃走、

ジャヴェルの自殺、マリユスとコゼットとの結婚、ジャン・ヴァルジャンの告白。そこに彼の第三の苦悶が生まれる。この世の有と無との戦いである。すべてを失った後、彼は死と微光との前に立つ。マリユスとコゼットとに向かつて彼は言う、「……お前たちは祝福された人たちだ。私はもう自分で自分がよくわからない。光が見える。もつと近くにおいで。私は楽しく死ぬる。お前たちのかわいい頭をかして、その上にこの手を置かして下さい。」かくしてパリーの墓地の片すみの叢くさむらの中に、一基の無銘の石碑が建った。

何故に無銘であつたか？ それは実に「永劫えいごうの社会的処罰」を受けた者の墓碑であつたからである。一度深淵しんえんの底に沈んだ彼は、再び水面に上がることは、いかなる善行をもつてしてもこの世においてはできなかつたのである。いや不幸なのは彼のみ

ではなかつた。種々の原因のもとに「社会的窒息」を遂げた多くの者がそこにはいた。ファンテイヌ、テナルデイエ、エポニーヌ、アゼルマ、アンジヨラ、ガヴローシュ、そしてまたある意味においてジャヴェル、その他多くの者が。ただこの世において救われた者は、マリユスとコゼットののみであつた。なぜであるか？ 彼らまでも破滅の淵ふちに陥つたならば、この物語はあまりに悲惨であつたらうから。さはあれ、それらもはや一つの泡沫ほうまつにすぎなかつたのである。大革命とナポレオンとの二つの峰を有する世潮にすべてのものを押し流し、民衆はその無解決の流れのうちに喘あえいでいた。ゆえに、ワートルローの戦いと、王政復古と、一八三二年の暴動と、社会の最下層と、パリーの市街の下したの下水道とが、詳細に述べられなければならなかつたのである。



以上がこの物語の大よその内容である。

一八四五年四十四歳にしてヴィクトル・ユーゴーは、詩作の筆を折つて政界に身を投じ、四八年二月の革命以後しだいに民主的傾向に陥り、五一年十二月ナポレオン三世によつてなされたクーデターに対しては、熱烈なる攻撃を試み、ついに身の危険を感ずるや国外に逃亡したが、ついで公に追放せられた。彼は初めブラッセルに赴いたが、次にイギリス海峡の小島ゼルセイおもむに行き、終わりにゲルヌゼーめいそうに赴いた。その間、一八五八年より六二年まで五年間の瞑想めいそうと思索とに成つたのがこの物語である。彼はその中に脳裏にあるものすべてを投げ込んだ。熱烈なる共和黨員であつた父より生まれ、追放令を受けた老將軍と還俗した老牧師との家庭教育を受け、詩人としてはロマンティック運動の主将であり、政客としては民主派であり、主義よりもむ

しる熱情の人であつた彼ヴィクトル・ユーゴーの脳裏に、最もあざやかに浮かんだところのものは、実に社会の底に呻吟しんぎんするレ・ミゼラブル（惨めなる人々）であり、彼らを作り出した社会の欠陥であり、彼らが漂う時運の流れであつた。そして彼らを描くにあたって、奔放なるおのれの想像と思想とに何らの抑制をも加えなかつた。かくしてできた物語をさして、環境と群集との詳細な描写のゆえにゾラの真の源であるといい、また、空想的な筋の運びと典型的な人物とのゆえに全くのロマンティックの作であるといい、あるいは、青年マリユスをもつて作者自身であるということとは、この物語の価値に何かをつけ加えるものでもなくまた何かを減ずるものでもない。作者は何よりもまづ詩人であつた、人生の詩人であつた。そしてこの物語は、一八一五年より三二年にいたるフランスの叙事詩である。そこに

おいては、愚昧な一老爺ろうやといえども、墮落した一売春婦といえども、みな古代英雄のごとき光輝を放つ。この光輝は実に作者自身の光輝である。叙事詩であるがゆえに、作中の人物もある点まで作者によつてその生命を保っていることは、あやしむに足りない。また作品中生なまのままの思想の多いことも、あやしむに足りない。

ワートルローにおけるナポレオンの敗戦をもつて、作者は神の意志によるものとした。訳者は今ジャン・ヴァルジャンの心の径路をもつて、作者ユーゴーの意志によるものとするのである。

作者は人類を導く上帝の手が「自由」と「正義」とをさすものであると説いている。訳者も今ここにジャン・ヴァルジャンを導いた作者の意図が何であつたかを説くべきであらう。しかし

訳者は、あえて、それを賢明なる読者の判断に任したい。そしてただ作者の言をここに付記するに止めておく。すなわち、本書のごとき性質の訳書も、「地上に無知と悲惨とがある間は、おそらく無益ではないであろう。」

一九一七年

豊島与志雄

## 改訳について

「レ・ミゼラブル」の翻訳を私が仕上げたのは、ずいぶん以前のことである。年少ひさい秀才の身をもつて事にあたつたので、意に満たぬ点が多々あつた。しかるに今度改訂の機会を得て、旧稿に手を入れてみた。

翻訳の仕事の難事であることは言うまでもない。ことに、自由奔放にペンを走らしたと思える「レ・ミゼラブル」のようなこうかん浩瀚なものについては、種々の困難が伴なうものである。だが私としては相当の努力はしたつもりである。私がとくに意を用いたのは、原文の調子を、気分を、なるべく保存したいということであつた。そのため、時には、莊重ではあつても拮屈きくくつのき

らいがあるかも知れない。それは余儀ないことであつた。「レ・ミゼラブル」は、世間で往々想像されてるような卑俗な作品ではなく、高遠な理想主義で一貫されてる作品である。

私はこの改訳をもつて、自分の「レ・ミゼラブル」翻訳の決定版としたい。再訂の余暇を持たないだろうからである。そして巻頭の私の序文は、この作品に対する私の若き日の感懐の記念である。

なお、書中傍点付きのところは、原書にておもにラテン語もしくははイタリツク字体となつてゐる部分である。

豊島与志雄

## 序

法律と風習とによつて、ある永劫えいごうの社会的処罰が存在し、かくして人為的に地獄を文明のさなかにこしらえ、聖なる運命を世間的因果によつて紛糾せしむる間は、すなわち、下層階級による男の失墜、飢餓による女の墮落、暗黒による子供の萎縮いしゆく、それら時代の三つの問題が解決せられない間は、すなわち、ある方面において、社会的窒息が可能である間は、すなわち、言葉を換えて言えば、そしてなおいつそう広い見地よりすれば、地上に無知と悲惨とがある間は、本書のごとき性質の書物も、おそらく無益ではないであらう。

一八六二年一月一日

オートヴィル・ハウスにおいて

ヴィクトル・ユーゴー



レ・ミゼラブル 序

底本：「レ・ミゼラブル（一）」岩波文庫、岩波書店  
1987（昭和 62）年 4 月 16 日改版第 1 刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2007 年 1 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

※注記：このファイルは、もともと「01 序」「02 改訳について」「03  
序」と 3 分割されていたファイルを一つにまとめたものです。